
おにのこ

原木野徹也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おにのこ

【Zコード】

Z2371M

【作者名】

原木野徹也

【あらすじ】

とある夜のこと、一人だった男の子は山に住む鬼と出会いました。出会いと、別れ。母と子。家族とは何か。そんな深くて難しいことなんてわからないけれど、ぼんやりとしたものが伝わりますように。

月の大きな夜だった。

見上げれば、落ちてくるのではないかと思つほど白く輝く大きな月が六番目の人とを着いてくる。寄り添つてくれているような安心感もあつたが、見張られているような息苦しい恐怖も感じる月だ。六番目はぶるりと身を震わせてまた前へと進み始める。

山は深く暗かつた。木々の隙間から月光が白く洩れではいるが、それは道を照らしてはくれない。何度もつまづき、折れた枝に皮膚を切られても、六番目は立ち止らなかつた。

「こゝが正しい道なのか分からぬ。道であるのかすらも分からぬ。戻る道も、先に何が潜んでいるのかも、何もかも分からぬ。それでも、六番目は進んだ。

山には鬼がいる、と今よりもっと小さなころに語り聞かせられたことがあつた。

山には鬼がいて、入り込んだ人間を皆喰らつてしまつたのだと。特に鬼は子供が大好きだから、絶対に山へ入つてはいけないよ、と。これを聞かせてくれたのは母だけれど、一番目の兄も何度も言つていた。入ろうにもお前じやまだ無理だろうけど、と笑いながら。

だから、六番目にもよく分かつていた。山に、しかも夜中に入り込むことがどれだけ危険であるか、よく分かつた上で、今日、入り込んだのだ。

意外にも足はすいすいと進んだ。坂道はきついが、歩けないことはない。まるで誘い込まれているようだと思つ。どうやら山の鬼と言つるのは本当に子供が好きなようだ。

（……なら、早く喰らつてくれりやあいいのに）

村へ帰るつもりはない。帰れなくていい。だって、六番目はいな

くつたつていい存在なのだから。

ああ、でも一番田の兄は心配するかもしれないな。

してくれたらいいと思つ。そつなうば、少しさは救われるだらうか。
どちらにしろ、もう関係ないことだ。

「あ！」

飛び出した木の根につまずき、六番田は地面に転がつた。小石が手のひらに刺さる感触に顔をゆがめる。起き上がる気力がない。思つた以上に身体は疲労していただようだ。

仰向けに転がつて、大きく息を吐く。このままじこで寝てしまつたら、鬼が来てくれるだらうか。

まつすぐ見た先に大きな月が見えた。まだついていたのか。柔らかな金の光に、六番田はそつと目を閉じた。

ゆつくつと瞬きを繰り返すうちに不思議なことが起つた。
月が、一一つ……いや、三つある。大きなまんまるい月と、鋭いけれど優しい、小さな光るもののが一一つ。

「ヒトの子」

透きとおつた声が耳朵を震わす。一つの光はじゅらじゅら瞳のようだつた。

「転んだのか。立てるか？」

声が降りてきて、六番田の身体を抱き起しす。着物やひざにつけた土ぼこつを、白く細い手が払つてくれた。

「血は出ないな。どうした、迷い込んだのか」

聞いかけには応じず、しゃがみ込んで視線を合わせてくれているらしい相手の姿をよく見てみる。あたりは真っ暗だったはずなのに、不思議とよく見える。細められた金の瞳に向ひつが透けてしまってうなほび細い白髪、それと額部分には一つの突起がぽこりと姿を現していた。

「お、こ……？」

どう見てもこの世のものとは思えない。六番田は今までこんなにも美しく清らかで澄んだ存在を目にしたことがなかった。まるで光をまとっているような。　ああ、だから辺りがこんなにも明るいのか。

「里の者はやう呼ぶ

ほとんど思わずといった咳きだつたが、白鬼は拾い上げ、答えてくれた。

「俺を喰つんか？」

「喰いはしないよ。それよりも、どうした。山に入るなとは言われなかつたのか」

「言われどる。けど、今日は逃げてきたから」

鬼は人を喰い、子を好むはずなのに、どうしてこんなことを聞くのだろうか。不思議だ。分からぬ。分からぬまま、なぜかすらすらと言葉が出てきた。もしかしたら誰かに聞いてほしかったのかもしれない。

「里ではおれが一番こまこから、おれは誰にも見てもらえんのんじや。他のみんなは働いとるから、仕方ないんじやけどな。でも、誰

も見てくれんから、おれのことなんて忘れとるから、おらん方がえんじやないかつて。……イチにいだけは、会いに来てくれるけど……。だから、出てきた。その方が、飯もいらんし、おつかあたちも助かると思つて

里で六番田はほとんど軟禁状態だつた。食事を忘れられるほど、いないといつてもいい存在だつた。他の兄たちも同じだつたのかどうかは知らない。ただ里に六番田の存在はなかつた。

もつとずっと幼いこりは一緒にいてくれた母もいつしか見なくなつてしまつた。たしか、七番田の子が死んでしまつてからだらうか。柔らかく暖かだつた手に、触れなくなつてからどれだけ経つただろうか。

それに、もういとも思つたのだ。元からない存在ならば、自分が消えたつて誰も気にしないと、だからもういと、六番田は初めて外に出て、山までやつてきた。

「それにな、山の前まで来て、呼ばれた氣がしたんじや。氣のせいかもしけんけど、おいでつて。いつちへおいでつて、誰かが呼んでる氣がしたから」

幻聴かもしれないけれど、それに勇気づけられたのだ。これでいいといわれているようで、安心した。そう言つと白鬼は驚いた顔をして、それからまた微笑んだ。胸の奥が光がさしたよつてむずがゆくなる。

「やうか、お前が……」

つぶやいた言葉を、六番田はよく聞き取れなかつた。

白鬼は六番田の頭に手を伸ばす。指先に触れたかたい毛髪に眉を顰めるが、すぐに田を細めるとゆつくりと頭を撫でまわした。まる

でわが子をあやすように抱きしめて背中をたたくと、六番田の田から涙が零れ落ちた。それに一番驚いているのは六番田だ。これまで哀しいと思つたことはなかつたのに。今だつて、哀しくなんかないのに。あふれる涙を止める方法が分からぬ。

さゆうひとつ白鬼にしがみついて、六番田は嗚咽を漏らした。純白の着物に染みが広がつていぐ。白鬼はたいして気にした様子もなく、六番田をあやし続けた。

どうしてこんなにも安心するんだろうか。こんなにも暖かいんだらうか。出合つたばかりなのに、相手は鬼であるのに、六番田はここから離れたくなかつた。人間相手に感じたことのないぬくもりが身体中に広がつていぐ。

「夜が明けてしまつ前に、今日はもうお帰り」

六番田の涙がようやくおさまつてきたら、白鬼は六番田の頭をゆるりと撫でてそう言つた。六番田はゆっくりと体を離し、赤くなつた瞳で綿のように白鬼を見上げた。白鬼はゆるりと笑む。

「夜が明けて、暁になつたらまた来るといい。私はいつでもここにいる」

夜は危ないから、と言つて白鬼は立ち上がつた。見上げる六番田の手を取つて、歩き出す。

「麓まで送りひ」

六番田の足に合わせゆつくりとくだつて行く。

六番田の手を包む白く細い手は意外に大きく、とても暖かかつた。ずっとここにいたいと思つたのに、何度白鬼を見上げてもそれを許してはくれなかつた。

「……なあ、あんた、名前はなんと言つたじゃ？」

麓まで近づいてきたとき、ふと思つ出したよつて六番田が問うた。

「おれは口ク。本当は名前なんてないけどな、イチにいは口クつて呼んでくれる。だから、あんたもそう呼んでくれ」

六番田にひとつては自分を認識する唯一のものだ。たつた一つの大物。

そうか、と白鬼は緩く笑む。

「名は、遠の昔に失くした。お前の好きなように呼べばいい」

「ほんとうか？」

とたん六番田は田を輝かせる。ビリシヨウカと口を尖らせ考え込んでいた。

「んーと、な。じゃあ、シロが良いー。その髪がな、すううに綺麗じやから」

安直ではあるが、そのいとけない幼子らしさに白鬼は優しく微笑みかけた。くしゃりと髪を撫でつける。それから行こう、と促した。

木々がだんだんと薄まり、六番田はようやく平地に辿り着いた。白鬼は山からは下りず、少し後ろで六番田が降り立つのを見ていた。

「ゆうくつと寝て起きたらいで。口ク　　お前なら山は邪魔しないだろ？」

六番目は名残惜しげに山を振り返ると、一度頷いて家へと走った。頭上には月が輝いている。どれだけ歩いても、いつまでもついてくる。最初はどこか恐ろしくもあつたその光が、今は暖かく感じる。

早く昼になれば良い。

どうせ昼はみんな外に出ているから、六番目がどこに居ようと気にしまい。たとえ見つかって叱られようと仕置きされようと、いまなら何でも乗り越えられると思った。

どうして今まで抜けだそうと考へなかつたのか不思議で仕方ない。仕事に縛られない分、人に縛られない分、自分はこんなにも自由だつたのだ。なんという皮肉だらうか。でも、それでいい。

音を立てないようそつと部屋にあがりこむ。部屋というにはあまりに粗末なその空間の隅に丸まり、薄い布つきに包まる。布団とは呼べないが、ないよりはましだつた。

早く昼になれば良い。

夜が明けて、日が昇つて、昼になつたら　自分は広い山の中で、自由に動き回れるのだ。

興奮していいる所為かなかなか寝付けなかつた。何度も山を閉じても山が気になつて仕方がない。それでも、いつしか眠りは訪れる。六番目は狭い室内にたつた一人で丸まつて、夜明けを待つた。

一（後書き）

誤字脱字がありましたら、「報告へださい」

やまとしき
山錦が散り、白く染まつた山がまた深い緑をたたえだした頃、里にはまだ一度も、雨が降つていなかつた。もうじき梅雨に入るころだ。このに、空には雲ひとつ見当たらない。雨どころかまだ初夏だ。ところに焼けつゝよつた日差しが里をおそつていた。

「もう畠のいくつかが駄目になつたる。こんなまじやあ、今年は何も採れんぐなるぞ」

「早いとこなんとかせにやあ」

里では大人たちが集まつて、日照りの現状を話し合つていた。どうにかしなければならない。このままでは里の者は皆飢饉で飢え死んでしまう。

そうならないためにもするべき」とは一つしかない。皆、それは分かつていた。

「……善吉」

「はい」

里の長が一人の男に声をかける。

「……分かつとるな」

「はい。おりよづにも、よづく伝えときます」

長は長く息を吐く。答えた男の瞳には、何も映つてはいなかつた。喜びも、哀しみも、怒りも、困惑も、絶望も。何一つ浮かびはせず、揺らめくこともなかつた。何もかも覚悟のうえ。だから男はあれを見はしなかつたし、愛しもしなかつた。ただ気にかかるのは妻のこ

とだ。妻もあれを見はしなかつたが、間違いなく腹を痛めて産んだのだから。気にかけているのは聞かずとも分かつていた。

「準備を」

長の一言に、皆が一斉に立ち上がつた。

「口ク、じつちに來い」

口クとは誰のことなのか。今の声は誰の物なのか。六番田は分からなかつた。

白鬼とはあれから毎日のように会つてゐる。霜の降りる日も白い雪を踏みしめて会いに行つたし、山桜を見ながらどこかから白鬼が持ってきた木の実を食べたこともある。友達もできた。山の中は複雑で、面白くて、飽きることがなかつた。

今日も今日とていつ抜けだそうかと考えていたら、声がかかつたのだ。

口クとは誰なのか。自分だ。それじゃあ、この声の主は誰だ？
低く響く声は男のものだとわかるが、一番田ではないようだ。聞いたことがない。ぱちぱちと田を瞬いて、ゆっくりと顔をあげた。見慣れない顔だつた。だが、六番田はよく知つてゐる。

父だ。

一度も自分を抱いてくれたことのない……いや、それどころか見てさえくれなかつた父が己を呼んでいる。そのことに困惑し、状況がつかめなかつた。

「何しとる。はよう来んか」

「あ、うん」

急かされ、何とか返事をして立ちあがる。父は六番田が立ち上がりたのを見ると背を向け、歩きだした。

細い縁側を歩き、六番田は初めて他の部屋へと入った。そこは当たり前だが六番田のこもる部屋より広く、ここでみんなは過ごしているのだろうかと六番田は思いめぐらす。

父は部屋の奥へと進み、胡坐をかけて座った。その隣には懐かしい母の顔がある。いつしか見なくなつた母の顔は、どこかしら沈んでいるようにも見えた。それでも、一度も六番田のほうを見ようとはしない。吸われ、と促され、六番田もおずおずと座り込んだ。

「お前には山へ行つてもいい。詳しく述べて母さんから聞け」

唐突に言葉は発せられ、そして終わつた。それで父の用は済んでしまつたのか、すぐに立ち上ると母と自分を残して出て行つてしまつた。

六番田はまだ状況が飲み込めずにいた。どうして自分はここに呼ばれたのか。どうして母までここにいるのか。どうして母は哀しげなのか。父はなんと言つていたか。山へ行く？ 自分が？ どうして急にそんな話に。山へ通つていることに気づかれたのか。それともついに追い出されてしまうのか。そうなのだろうか。里に口照りが襲つていることは、六番田も知つていた。

それならそれでいい。山のほうが居心地が良い。

「口ク」

細く消え入りそうな女の声が耳に届く。母が相変わらずこちらを見ないまま口クに呼びかけていた。

「父さんは忙しいけど、代わりに母さんが話すからな。よしひ聞きんさい」

はい、と六番田は頷いた。

「里に雨が一度も降つてないのはじつとるね」

また頷く。

「こなまじやあ、里のもんはみんな食え死にしてしまつ。……山の鬼の話は覚えとるか？」

「覚えとる」

「あの鬼は里の守り神じや。あれがおるから里は守られゐる。けどあれは鬼と呼ばれる。なんでか分かるか」

今度は首を横に振る。分からなかつた。あの容姿からではないかとも思つたが、里のほとんどの者が白鬼を見たことはないのだ。これまでもやつだつたろう。あの優しい白鬼がどうして人を喰らつといわれるよつになつたのか。六番田にはどうしても解せない。

「あれの力は永遠じやない。使えば力は減つていぐ。力が減れば里に災厄が来る。じやけえ、山に捧げるんじや」

なにを、とは母は言わなかつたし、六番田も聞きはしなかつた。だから自分は山へ行かせられるのだ。

「山と鬼は人を喰い、力をつけ、里を守る。あれは里の守り神じやけんじ、子を喰らう鬼なんじや」

だから山へ入つてはいけない。いつ鬼に出会いて喰われるとも分からぬからだ。

「……準備もある。山に行くのはまだ先じゃけ、よくわからんじゃ
うつが部屋で待つとわ」

また呼ぶ、と母は大きく息をついた。

六番目は立ち上がり、母に背を向け部屋を出る。母の顔をもつと
見ていたかったが、どれだけ見ようと母が自分を向いてくれること
はなかつただろう。

また部屋に閉じこもつて、隅つこに丸くなる。山へ行こうか、と
思つたけれどやめておいた。いつ母が呼びに来るか分からない。

山へ行つたら、今度こそ白鬼に喰われるのだろうか。でも、白鬼
は肉を嫌つてゐるようだつた。じゃあ、一緒に暮らせるのか？ ず
つと、あの心地よい場所にいられるところだらうか。

不思議な気分だ。

山に行くことはすでに習慣であるし、ずっと白鬼のそばにいたい
と思っていた。喰われるのも別にかまわない。けれど、……素直に
喜べなかつた。不思議な気分だ。哀しくはない。痛くもない。けれ
ど、嬉しい、とも言い難かつた。久方ぶりに母に会つたからかもし
れない。

母には考える、と言わたが、考えはまとまりそつにない。六番
目は眠りにつくときのよつとつずくまつ、強く目を閉じた。

口ク、と呼ばれて六番田はのそりと起き上がつた。
どれだけ時間がたつたのだろう。田が沈んで、夜が明けて、もしかしたらもう一度それを繰り返したかもしれない。六番田はその間うすくまつ、ほとんどそこを動かなかつた。

破れた障子をあけた先には、母と一番田が立つていた。一人は六番田を確認すると歩き出す。六番田もそれについて行つた。

「」の間の部屋に着くと座られる。

「鬼じやゆつても神せんじやけえね。身体は綺麗にしつかんと」

喰われるならなおりじや、と母は言つた。相変わらず消え入るよつなか細い声だつた。

「イチ。湯、沸かしてくれるか。後で口ク入らせて、髪洗つたげえな」

一番田は頷いて、外に出て行つた。一度六番田を見た田は悲しげで、苦しそうだつた。

それを見送つていると、母が近づいてくる。母は六番田の着物を脱がせ、湿らせた布で腕を拭きだした。

「……山へ行くんは、怖いか」
「怖かない」
「やうか」

六番田は即答した。怖いはずがなかつた。山は六番田の味方であるからだ。

「……お前が山へ行くんは、ほんとさすりと分かつとったんよ」

六番田の方が一瞬びくりと跳ねる。山へ通つてゐることを知られていたのかと、ほんの一瞬だけ思つたからだ。けれど母の言つた言葉を思い返して、そうではないと気づいた。母が言つたのは、山の生贊になることが分かつてゐた、ということだ。

母は六番田の反応を驚きと取つたのか、柔らかく身体を拭いながら話を続けた。

「時が来れば子が選ばれる。いつ選ばれるんかは分からん。けど、選ばれねばすぐに分かる」

母の手の動きがはたと止まる。俯かされた顔はよく見えないが、触れた細い指先が細かく震えていてことに六番田は気づいた。

「……お前が生まれたとき、お前の髪は真っ白だつたんよ」

六番田のかたい髪に、白く細い指が触れる。白鬼に触れられた時はまた違つ感触に、六番田はよく分からなくなつた。同じ白く細い指。けれど、母のそれは柔らかかつた。

「髪は一晩たつたら黒くなつとつた。じゃけど、それは明らかなん……、印じやつた」

いつかの将来むくじに鬼へと喰われてしまつ子。愛するにはあまりにも酷ひどかつた。父は初めから見ず、七番田が生まれてすぐに死んでから、母も諦めた。失うつらさを知つたからだといつ。大事にしているものか消えてしまつのがわかつてゐるのなら、気に掛けないほうがいいと考へたのだ。

「お前はずつと一人の部屋じゅったね。……淋しかつたか？」

六番田は首を横に振る。淋しくはなかつた。

「おれ以外はみんな働いとるんじや。淋しかない。仕方のないことじやけ」

「どうか、と母は頷いた。

「口クは、ほんとにええ子に育つたねえ」

止まつたままだつた母の手が再び動き出す。先ほどよつも手つきが荒く、しきずられる腕が痛いほどだつた。

「お前が一人部屋だつたのも、選ばれたけえじや。お前が綺麗な今までいれるよう、長がそつせえやうてな」

確かにあの部屋は狭かつたけれど、小さな六番田が一人で過ぐすには広すぎるようと思つた。今いるこの部屋で他の皆が過ぐすのならば、狭くて仕方がないだらうと思つ。

母の唇が何か動いた気がしたが、漏れ出した息に音は含まれておらず、六番田には聞き取れなかつた。

それきり、母は口を開かなかつた。そのうちに一番田がやつてきて湯が沸いたと知らせてくれた。母は六番田に触れていた手をそつと離す。来い、といつ一番田に頷いて、六番田は立ち上がつた。

「……今日、行くけえね」

後ろでぽつりと呟かれた言葉に、六番田は静かにうなずいた。

風呂場まで連れて行かれ、着物を脱がされた。何度もかけ湯をしてからそつと湯船につかる。

湯につかつたのはいつぶりだろうか。もしかしたら初めてかもしれない。冷え切つたままの身体に風呂の湯は熱いくらいで、一一番田の身体はすぐに真っ赤になつた。一一番田が頭の上から湯をかけ、固い髪を洗つてくれる。

「なあ、イチにいは知つとつたんか？ おれが山に行くつて
「……知らんかった。おかしい、とは思つとつたけど……」

一一番田は悲痛な面持ちでこたえる。六番田のことを家族の中で唯一気にかけていてくれたから、今回のことで苦しんでいるのだろう。大丈夫なのに、と六番田は思う。決して口には出さないけれど。ばしゃん、ともつ一度六番田の頭に湯をかける。

「……知つとつたら、母さん達にあんないとゆうてなー」

あんなこと、とはどいつもこつたことなのか、一一番田は話せなかつたが、大体の見当ははついた。一一番田は誰より優しいから。

「イチにい。あれ、山ん行くの怖かないよ。嫌でもない。じゃから、そんな顔せんで」

笑つたら、一一番田は余計泣きそうな顔になつた。六番田が我慢しているとでも思つてゐるのだろうか。だとしたら、一一番田は間違つている。

一一番田には、言つてもいいだろうか。一一番田の考えが間違つているとはいゝ、自分のせいで哀しい顔をされるのは嫌だつた。

自分が山に入り、白鬼と仲良くしていふことを言つたら、一一番田の顔は変わるだろつか。……何も、変わらないだろつか。六番田が

何を言ったところで山へ入ることは変わらないのだか。湯からあがり、ありがと、と呟く。

「イチにい、ありがとお」

ずっと、気にかけてくれていて。

それを聞いて、六番田はあいまいに笑った。一度も行くなとは言わなかつた。一番田も、分かつてゐるのだ。

布で身体を拭いて上がると、真っ白な着物を着せられた。白鬼とおそろいのようで嬉しくなつたが、顔には出せなかつた。着物を着終わると、六番田はいつもの部屋に移された。だが、そこにはすでに母がいて、いつも一人きりで過ごしているそこには人がいることに違和感を感じてならなかつた。

「夜に里を出る。それまで、寝ときんさい」

母に誘われ、六番田は母の腕の中にいた。柔らかな胸の感触とぬくもりにだんだんと六番田の意識がまどろんでくる。ゆるりゆるりと少し柔らかくなつた髪をなでられ、心地良い、と思つてしまつた。懐かしい、懐かしい、ぬくもり。山に行くことは怖くないけれど、少しだけ、心が揺れてしまつた。

「口ク、口ク。『めんな……』

六番田が完全に眠りに着く直前、母がささやいた。

（そんなこと、今やわんでくれ……）

見てくれなければ分からなかつた。言つてくれなければ分からなかつた。触れてくれなければ分からなかつた。今更大切にされて、

「どうしてお母さんとお話しするのだらうか。

六番田は母の着物を、きゅっと掴んだ。それしか、できなかつた。

ふと田を見ましたら、外はすでに暗くなっていた。ずいぶんと長い間眠っていたようだが、母は自分を抱きかかえたままだった。きっと足もしごれているし、腕も疲れているだろう。負担をかけてしまつたのは分かつていたけれど、今はまだ甘えていたい気分だった。

「口ク、起きたか」

「……うん」

「そろそろ時間じゃ。外ん出え」

「ぐりと頷いて、六番田は立ち上がった。そのまま縁側へと出る。外が明るいと思ったら、松明を持った一番田が待っていた。その向こうにはもつと大きな明かりが見える。

地面には真新しい草履が置いてあった。これを履いて出ればいいのだろう。六番田は縁側に腰掛け、慣れない草履を履いた。

一番田に促され、足を踏み出す。てっきり母もついてくると思ったら、母は縁側に立つたままだった。六番田の様子に気づいた母がゆるりと笑んだ。

「山までは、男しか行けんのんよ。イチに連れてつてもらー」

母は笑っていたが、田の下が赤かった。六番田は少しだけ進んでいた足を戻し、母に駆け寄る。一番田はそれを止めなかつた。

「おつかあ、ありがとね」

母を見上げて、それだけを伝える。母の瞳が一瞬で揺らめいたが、六番田は一番田のもとへと走つた。あらりと泣き崩れる母の姿がか

すめる。けれど、氣にしてはいけなかつた。

「行くぞ」

もう一度一番田に促され、今度こそ六番田は進みだした。里の男たちの間にに入る。火が眩しくて、目がくらみそうだ。周りを見渡してみると、どれも同じ顔に見えてよく分からぬ。ただ、そのどれもが六番田を見なかつた。

ぞりぞりぞりと群れは動きだす。六番田も遅れないよう、一番田に促されながら歩き出した。

「……本当に行くんか」

ぼそりと、一番田が何やら呟いた。六番田は一番田を見上げる。今更何を言つのだらうか。行きたくないとでもいえば、一番田は納得するのだろうか。行くのか、だなんて。

六番田には、山にしか居場所がないといつて。

そうしたのは、一番田を含む里の物だといつて。

「……そうするしか、ないじやろ」

ぴたりと集団が足を止めた。六番田の人だかりが割れた先には鬱蒼と茂る木々やシダが迫つていて。進むと一番田のみがついてくる。六番田が山に近づくにつれ、道が開いて行く。生い茂つたシダは下がり、垂れた枝はピンと伸びる。獸道とも呼べないそれはしかし、確かに道であった。

不思議な現象だが、六番田が山に来るたび起つることなので別段驚きはしない。だが、他の男たちは違つたらしい。小さなどよめきが駆け巡る。

そんな中、六番田はためひひ」となく山へと向かつ。道の奥に、

白く光る姿を見つけたからだ。久しづりに見るその姿に、六番田の胸が熱くなる。

「いらっしゃい、と山が笑う。おいで、と誘われるままに、六番田は歩を進めた。

山に踏み入ったとき、六番田は思わず駆け出した。背後で山が道を閉ざしていく音が聞こえる。そのままに向こうで一番田の、己を呼ぶ声が聞こえた気がした。だが、気にする暇も、必要もなかった。白い胸に飛び込むと、白鬼はしっかりと受け止めてくれた。

「シロ、シロ。なあ、これからずっと一緒に居れるんか？ おれ、ここで暮らしてええんよな？」

これまでふらふらしていた心が嘘のように固まった。どうして母のことなど気にしていたのだろう。自分がいるべき場所はここなのにはしかなかったのに。

母の哀しむ姿が気にかかるいわけではなかつたけれど、それよりも喜びで六番田の胸はいっぱいだった。

白鬼はゆるりと笑う。久しく触れる細い指先が心地よい。

「もちろんだ。ここは私と、お前の家なのだから」

ぽつり、と頬に何かが滴つた。最初はどちらかが泣いているのかと思ったが、そうではないらしい。だんだんと水滴の数は増え、木の葉にあたり、さあさあと音を立て出した。雨が降ってきたのだ。山へ子を捧げると天災が鎮まるというのは本当らしい。あんなにも長く続いていた晴天が、一気に雨へと変わったのだ。

「なあ、シロはおれが来る」と、分かつとつたんか？」

「誰かがやつてくることは分かつていた。けれど、それが口クだと知らなかつたけれど」

お前でよかつたと、白鬼は笑つた。

それから雨がしのげる、おそらくは白鬼がいつも過ごしているであろう、岩場に移動した。ちょっとした洞穴の天井部の岩が張り出し、雨から守つてくれていた。くぼんだ洞穴の中は狭いが、二人くらいなら軽く過ごせるだろう。奥に灯された火は暖かいが、少しだけ痛かつた。

「……多少の火は仕方ない。山も分かつてのことだよ。むやみに傷つけたりはしない」

「うん」

奥に入り込み、小さな炎から離れた所にうずくまる。その隣に白鬼が座り込み、丸まつた背中を撫でられた。ほつと息を吐き、六番目は身体を伸ばす。

「眠くはないか」

「昼間たっぷり眠つたけえ、大丈夫じゃ。な、山のいろんな場所、もつと教えてな」

山に遊びに来ている間、六番目は白鬼と山にたくさんのことを使えられた。どの木がどこにあるか、どんな動物がいるのか、食べられる草や木の実、夕日がきれいに見れる場所。たくさん、たくさん、教わつた。けれどそれでも足りないくらい、ここにはまだ知らないことがある。この岩場もその一つだ。おそらく、他にも寝泊まりできる場所があるのだろう。まずは探索だと、六番目は張り切る。

白鬼は薄く笑い、頷いた。

「ああ、そうだな。だが、夜が明けてからだ」

「眠うないつて」

「時間はまだある。今はゆっくり休みなさい」

そう言われて頭から頬にかけて撫でられると、眠くなつてくるような気がした。白鬼の肩にもたれかかると、背を優しくたたかれる。まどろむ視界をそのままに瞼を落とせば、六番田はゆっくりと眠りの中に落ちていった。

おいで、と誘われた先には、大きな獸がいた。

今夜の寝床は大きな木の下で、蒸し暑くなつてきたこの時期にはぴつたりなほど風が心地よかつた。近頃は毎晩ここで寝泊まりしている。この木は白鬼がことさら大切にしていて、時々声をかけるような仕草も見受けられた。だからなのか、六番田もここが一番落ち着き、安心した。

最近では山の声もよく分かるようになつてきた。以前は一部しか聞き取れなかつたが、今は耳を澄ませばたくさん言葉が聞き取れる。揺れる草から、舞い落ちる木の葉から、ざめく木々から、かすかに響く地面から。もちろん動物たちの声も、たくさん聞こえてくる。あまりにも多くて全部聞いていると頭がいっぱいになつてしまつから、聞き流す方法も覚えていた。

朝から、今日はやけに静かだと思っていたら、田の前の獸が原因だつたらしい。こつもそちらを駆け回つている狸や狐、鼠なんかはおびえて巣穴にもぐつてしているのだ。

「お初にお田にかかります」

恭しく頭を下げ言つた獸に、六番田は別段驚きはしなかつた。動物の言葉を聞くことも、珍しいことではなかつたからだ。その言葉が頭に浮かんでくるものであるのか、耳に届くものであるのかの区別など、六番田にはつかなかつた。

獸は黒毛の、大きく美しいヤマイヌだつた。この田のヤマイヌとは比べ物にならないくらい大きい。

ヤマイヌはクンと名乗つた。本当はもう少し違う言葉なのだが、六番田にはうまく発音できなかつた。何度か練習してみたのだがうまくいかず、それを見ていたヤマイヌがクンでいいと言つたのだ。

白鬼が言つには、ヤマイヌの一族は時折この地を訪れてくる知人らしい。今回はヤマイヌ一匹のみだが、季節によつては家族を連れてくることもあると言つてゐた。

「クンもすつと長い間生きとるんか？」

「主様ほどじやありませんが、普通のものよりは長く生きてあります」

主とこつのは白鬼のことだつた。動物たちは皆白鬼のことを主と呼ぶ。それはそのまま、この山を治める主であるからだらう。

「夕餉はクンと共にしようつて思つが、良いか？」

白鬼の誘いに、六番田はもちろん頷いた。

脇間はヤマイヌの背中に乗せてもらい、山の中を駆け回つた。この山に住む小さなヤマイヌも一緒だ。朝はおびえていた動物たちも、巣穴から顔をのぞかせていた。一番の仲良しである子ザルのナナも降りてきて、六番田の肩で笑つていた。

夕餉はいつもどおり、野草と木の実だけだった。客がいるといつてもその辺りは変わらないらしい。

一度だけ、来たばかりのころに肉を出されたことがあるが、六番田はどうしても食べられなかつた。口に入れて噛みしめるのだが、身体が受け付けないかのように吐き出してしまつ。無理しなくともいいと白鬼は言つたが、六番田はそれでも食べようとした。「おれんために食われてくれとるんじやから」と頑として聞かなかつた。

結局その肉は山のヤマイヌ達が食べててくれた。六番田は何度も謝つたが、白鬼はそのたびにそれでいいと笑つて答えた。それでいい、それがいいのだと。

それ以来、食事の際に肉が出てきたことはない。

ただ、今日ばかりはヤマイヌのために肉が用意されていた。己で

とつてきたのか白鬼が用意したのかは知らないが、六番田は嘆いたりはしなかつた。それが「命」であるのだから。そういうもののなだから。自分でって、そつやつて生きてこる。

「^{とき}刻が来るのですか」

火の向こう側で白鬼とヤマイヌが話している。聞こえてくる言葉は分かるが、それが何を意味して何を話しているのか、六番田にはよく分からなかつた。聞いてはいけない内容な気がして、六番田は顔を伏せた。

白鬼が頷くのを見て、ヤマイヌは淋しくなる、といった。

「あれはすでに役目としての力を備えてこる。立派すぎるくらいだ」

淋しくなる、もう一度ヤマイヌが言つて、白鬼もゆるりと頷いた。そろりと頬をなでる風が、なぜか胸に染みた。

夜のうちにヤマイヌは山から去つて行つた。もう少しこればいいのにと言つた六番田に、ヤマイヌは冬になつたら家族を連れてくると約束をした。ヤマイヌの住む地は北の果てのため、この地は暑くてたまらないらしい。ならばなぜこの時期にやつてきたのかと訊ねれば六番田にあこがれをとのことだつた。無理をしなくてよかつたのにと歎を尖らせた六番田に、務めだからとヤマイヌは笑つた。

「なあ、シロ。シロは淋しゆうないか?」

ヤマイヌを見送つた後、六番田はふと白鬼に訊ねた。

「昨日の話、ちょっとだけ聞こえてな。淋しくなる、つてよおつたから。シロは、淋しいんか? 淋しくなるんか?」

必死に問いかける六番目には、白鬼はしゃがみこんで六番目に視線を合わせると、そつとその小さな体を引き寄せた。

「淋しくはないよ。ここには私がいて、お前がいて、山がある。ずっと変わらない」

それに安心したように笑つた六番目の口から、ふわ、と欠伸が漏れる。白鬼はくすりと笑んだ。立ち上がりと六番目の手を取つて寝床へと向かつ。

「シロは……、眠つ、ないんか？」

歩きながらもまじろんでくる眼をこすりながら、六番目は白鬼に訊ねる。最近はすぐに眠くなる。朝もなかなか起きれないし、昼間動物たちと遊んでいるときでさえ気が突いたら寝てしまつていることもある。

それに比べ、白鬼はいつ寝ているのか全く分からなかつた。六番目が寝るまでそばにいてくれるし、六番目が目覚めれば白鬼はすでに起き、寄り添つてしてくれる。少し前に夜中に起きてしまつたときでわえ、白鬼は眼をぱつちりと開けてそこにいた。

「……私は寝なぐても大丈夫なんだ。口クはゆつくりお休み」

今のうちなのだからと呟かれた声が遠くなり、歩いている最中だというのに六番目は眠つてしまつた。倒れそうになる身体を抱きかかえ、白鬼は巨大な樹木の下に六番目を寝かせる。

白鬼はその樹木に触れ、そつと額を押しあてた。

六番田が山へと出され、ふた月が過ぎようとしていた。母は田に瘦せ劣り、家事は娘にまかせっきりになつていて。誰が何を言おうが頭を振り黙り込み、かと思えば突然喚きだす。そんな母を父は何度も殴つた。

「何度言えば分かる。六番田は山のもんじや。生まれる前から決まつとつたことじやんひー。」

「あん子は私の子じや。私が腹あ痛めて産んだ子じや。返してくれ、返して、口クハー。」

返して、返してと母はひたすらに喚ぐ。父はつべつた拳を下ろし、深いため息をついた。何を言つても聞かないだら。放つておくれ、が一番だと結論付けた。

しばらくして、父が出て行つた、もとは六番田が使つていた部屋に今度は一番田が入つてきた。うなだれる母の肩に手を置き、そつと母の言葉を聞く。六番田を案じていた唯一ともいえる存在だからこそ、一番田は母の気持ちが痛いほどわかつた。

「イチ……。あんなええ子は他におらんのんよ。ああ、ああ、返して。口ク、口ク、ああ……」

「かあさん、口クが山ん行つて、もうふた月じや。口クは、もう帰つてこん」

つひいのは同じだ、けれどもう諦めなければならないのだと、何とか一番田は諭そつとする。だが、母はやはり頭を振るばかりで、顔をあげようとしなかつた。やはりだめかと一番田が小さく息をついたとき、母が何やら呟きだした。

「ああ、憎い……、私から口クを奪つた山が、鬼が憎い……。生きとらんでもええ。ただ、あん子を奪つた鬼が憎くて、恨めしゅうてたまらんのんじや」

「言つたかと思ひと母は急に顔をあげ、一一番田にすがりつべ。

「なあ、イチ、頼む。鬼を殺してくれ。口クを奪つた鬼を、殺してくれえ！ 鬼が生きとる限り、私や諦められんのんじや！」

頼む、と掴んだ袖を揺さぶりぬ。母の気迫に一一番田は茫然としてしまつた。母の気持ちは分かるはずだつた。けれど、一一番田の想像を超えて、母は六番田を恋しがつてゐる。神である鬼を……、屠れとこ「元」。

「かあさん、それは……」

「なんね、あんたまで鬼の味方をするんか？ みんなみんな怖がつて……」

ひとしきり叫んだ後、母は何を思つたか急に走り出した。一一番田が慌てて追いかけると、母は包丁を持ち出し山へと駆けて行つていて。それを後ろから押さえつける。母が喚き、振り回す包丁をはたき落とし、一番田もまた、叫んだ。

「かあさん、鬼を殺したからってなんもならん！ 鬼がおらんかつたらこの里はどうなるんじや。六番田が行つてすぐに雨が降つたんは、母さんだつて知つとんづが」

六番田が山へと駆けだしてすぐに降り出した雨は里へと恵みをもたらし、これまで安定した天候をとえてくれている。それは鬼の

存在と、供物が必要であるとこ^トとを信じせらるはは十分だつた。

「誰も手を貸してくれんのんなら私が一人で行つて殺してやるんじ
やー！ イチ、離しい。鬼を、鬼を……ー」

「おりよー！」

騒ぎを聞きつけた父がやつてきて、母の頬を打つ。暴れていた母は糸が切れたかのように動きを止めた。呆けた田で、田の周りを赤くする父を見る。

「何をゆうとんじや。ええ加減にせえ

「……あんたにせ、わからん」

母の唇が震える。怒りか、哀しみか。一番田にせ判断がつかなかつた。

「なんで、なんであんなええ子が取られにやならんかったの。会つことも……、触れることもほとんどできんで、取られてもうつた。これ以上自分の子おをなくすんは嫌じじやー」

憎い、と母は繰り返す。それに父はため息をつき、母ではなく一番田に叫びた。

「イチ、母さんを部屋に連れて行け」

「父さん……でも」

「……長たちと話す。母さんから離れんよ！」

一番田せじくつと囁き、うなだれる母を連れていった。周りではほかの兄弟が心配そうにこちらを見ていた。

「すみません、長」

「いや、いい。母が子を求めるのは、子が母を求めるのと同じで、当然のことじや」

夜、里の男たちだけで集まつていた。議題はむちむち、六番田の母についてだ。

「神殺しなどあつてはならぬ。おつよひに死の毒だが、どうしようもない」

「しかし、あのままではおつよひがどうなるか……」

「失礼します」

話し合ひが行われてゐる途中、一一番田が室内へと入つてきた。

「イチ……。母さんは」

「ミツに預けてきた」

驚きに口を開き瓶を漏らす父に警えて、一一番田は座り、長へと田を向けた。床に手をつゝと深く頭を下げる。

「お願いします。どうか、母の願いを叶えたつてください」

長は静かに息を吐き、一一番田に先を続けさせた。一一番田は顔をあげて続ける。

「母は」とまじやあ狂つちまつます。俺も、六番田のことは悔しゆつになつません。鬼を殺さんでもええ。六番田を連れ戻せれば、

ええんです」

「イチ、六番田は……」

「口クは生きとつよ」

咎めよつとする父の言葉に、一番田は即答する。ただのカンでしかなかつたが、一番田は確信していた。

「もし六番田が鬼に喰われとつたとしても、それでええんです。鬼が死んだかどうかなんて、母にはわかりません。じやから、男たちで山ん中を捜すだけでも、お願ひします」

一番田はもう一度、深く頭を下げた。それに対し長を含む男たちはふむと頷きを交わす。

「すぐことは言いません。今は大事な時期ですけえ、山に氣をかける暇はありません。じやから、収穫も祭りも全部終わつた後でえんです」

「確かに……。そん頃なら山は裸になる。力が衰え、新たな力を蓄えるため眠りに就く時期じやからな。邪魔も少なかろつ」

ざわざわと男たちの声が聞こえ出す。長はそれらに頷き、一番田を向いた。

「あいわかつた。そろそろ儂らも決断をせねばならんのかもしけん。わしらは山に守られ、甘えすぎた。そのせいでこの地に縛られ、子を亡くした母が悲しんでいるのな!……、考えねばならんのだろつ」「長……それじゃあ」

「おりよつの言つとおりにしてよ。たとえ鬼から六番田を取りかえしたところで、また新たな子が選ばれるだけじや」

一番田はぱりと顔をあげ、長を見る。その目が確かに決意に満ちているのを見て、一番田はまたもや頭を下げた。床に額が突くほど深く、しっかりと頭を下げる。

「ありがとうございます……」

隣では父が同じように頭を下げていた。なんだかんだと言いつつも、父も母を心配していたのだろう。
そして里は動き始めた。六番田を喰らつた、鬼を屠るために。

呼ばれた気がして、六番田は眼を覚ました。口ク、と聞きなれな
い高く掠れた声が自分を呼んでいる。それが母の声であると気がつく
のに、そう時間はからなかつた。

山の中の少し開けた、里が見える場所へと移動する。あまりにも
小さくてどれが誰であるかは分からなかつた。ただ、あそこには自
分を呼ぶ母がいるのだ、と。六番田は里から田を離すことなくじい
つと見入つていた。

口ク、また、声が聞こえた。けれどそれは母のものではないよう
だ。

「……戻りたいか」

振り返れば、いつの間に来たのやら、白鬼が六番田の様子をうか
がつていた。白鬼の問いに六番田は頭を振る。

「おつかあのこととは気になるけど、戻りたいとは思わん。おれの家
は山だけで、おれの家族はシロだけじゃ」

そう言つて六番田は白鬼の着物の裾を握る。視線でそうだらう、
と問いかけると、白鬼は薄く笑い頷いた。

山では緩やかに時が流れる。何も変わらないようで、山は急速に
変化を続ける。それは白鬼はもちろん、六番田もよく分かつていた。
けれど、それでも変わらないと思つていた。だつて、山の姿がど
れだけ移り変わらうと、山に変わりはないのだから。変の不变。そ
れは自分たちも同じなのだと。きっと、それを思つていたのは六番
田だけなのだろうけど。

そうして今日も、眠りに就く。

どれくらいの間眠っていたのだろう。最近ではほんの一日前寝ていて、起きていることのほうが多い。もしかしたら一、二日寝続けていることもあるのかもしれない。ここには時間を知るすべが太陽しかないから、暦がいつであるかなんて六番目には分からなかつたし、知る必要もなかつた。山の様子を見れば、大体の季節は分かる。

最近はめっきり冷え込んで、手足が冷たくなつてきた。山の木々も葉が落ちてみすぼらしい姿になつてしまつたし、時期に冬がやつてくるのだろう。

むぐりと起き上がりながら、六番目は違和感を感じた。何が、とはつきりしたものは言えないけれど、何かがおかしい。

「……シロ？」

赤くなつた手をこすり温めながら、六番目は白鬼を呼び掛けた。白鬼がいつもそばにいるわけではなかつたが、六番目が起きるといつもどこからともなくやつてくる。呼びかけても姿を現す気配がないといつのは、どうもおかしかつた。

ガザガザとシダや下草が揺れる。動物たちも姿を現さない。裸になつた木たちも、どこか緊張しているようであつた。

（シロに、何か、あつた！）

山の主である白鬼に危険なことがあるとは思えなかつた。けれど、六番目の頭にはそれしか浮かんでは来ない。そして、それは間違いではないのだと、頭のどこかで確信していた。

六番目は走った。どこにいるのか分からぬ。けれどただ、がむしゃらに走った。六番目にとって白鬼は、唯一の家族で、何よりも大切な存在だったから。

走つて、走つて、走つて、六番目はようやくこの違和感が何なのか気が付いた。ヨソモノが山に入りこんでいるのだ。だからこんなのも胸がざわついて、自然と眉根が寄ってしまうほどの不快感を得ているのだ。

岩を飛び越え、木の根を跨ぎ、下草は勝手に六番目から避けていく。それでも六番目の息が乱れる気配がない。この半年ほどで、六番目には体力がかなり付いていた。それに、何かが力を与えてくれているようにも思う。何か、が何かなんて、六番目には分かり切つていた。

ガザツと音を立てて、六番目は獣道に入り込む。とそこで半年前まで見慣れていた姿があった。ニンゲンだ。不快感に顔がゆがむのも気にせず、六番目はそのニンゲンに言葉を掛けた。

「……イチにい
「ロク」

突然現れた六番目に田を見開いていた一番目は、それが己の弟であると分かると一気に顔を綻ばせた。ロク、ともう一度呼びかけてくる。

「ロク、やつぱり生きとつたんか。良かつた」

何が良かつたのかと六番目は口に出しそうになるのをこらえた。相手は自分を気にかけてくれた存在なのだ。今はひとつあれ、少なくとも相手は自分を大切に思つてくれている。

「ロク、帰ろう。かあさんが待つとる」

「……何をしに来た」

思つたよりも低い声が出たことに、六番田自身が驚いていた。声でいのか話しか方まで自分ではないようだ。これではまるで、と考えて、六番田は息をのんだ。

一番田も驚きを隠せないようだ、またもや田を大きく見開き、口に感に氣味に六番田を呼ぶ。

「口ク……？」

「何をしに来たと聞いている、イチに！」

出でくるのはやはり幼子にしては低い声だったが、今度は六番田も驚かなかつた。そういうことなのだ。

「……山から口クを連れ戻しに来た。母さんが泣いてお前を待つとる。帰る、口ク」

一緒に山を出ようと一番田は呼びかけた。山の仕事はそれなのだと言い、険しい山道を一步一歩六番田に近づいてくる。六番田は動かず、ただじつと一番田の様子をうかがついていた。そこでふと思いつ出したように、ぱつりと田鬼の名を呼ぶ。

「……シロヌ？」

その歎きに一番田はびたりと足を止めると、訝しげに六番田を見た。

先ほど一番田は「山の仕事は、といった。ところとは他にも役田を請け負つたものがいるところ」とだ。一番田は六番田を捜しに、ならば、他の者はどうに行つたのか。そんなの、考えなくとも分かる」とだ。

「イチにい、シロはどこに行つた」

「口ク、シロって誰のことじや」

「わかるだら、シロはシロだ。この山の主だ」

言えば、一番田ははなつとした後に田をそらした。

「教えて、イチにい。シロはどこに行つたんだ。何が、起きている」

「言いつのない不安感と気持ち悪さがこみ上げる。何かが起つてこるのは間違いない。そしてそれをこの二ングンは知つてこる。ああ、気持ち悪い。もつとたくさんの中モノが来ているに違いない。ここに在つてこいのは、木々と草花と動物と、それから白鬼と六番田だけなのに。」

「口クは知らんべええ。それよつ、いつかに來い。山を降つよつ。家に帰る」

一番田が六番田に触れようと手を伸ばしていく。嫌だ、と頭の中で叫びがあがつた。口からは零れなかつた嫌悪が、体中から溢れだす。身体が熱い。そう思つた刹那、バチンシと音がした気がした。はじけるような感覚にきつく閉じていた目を開けば、少し先で一番田がうずくまつていた。先ほどまで確かに田の前にいたはずなのに、と六番田は困惑する。

一番田は腕を抑えていた。そこからは田が痛くなるほど赤い鮮血がにじみ出している。それは、六番田がやつしたことなのか。一番田はもちろん六番田にすら何が起こつたのか分からず、その場に硬直していた。だらだらと血が地面に垂れ落ちる。それを見て六番田は山が穢れてしまったと山にそつと謝つた。山からは氣にするなど眠たげな声が返つてくる。それにもう一度謝つてから一番田を見ると、

一番田は六番田をきつく睨みつけていた。血走ったその眼にゾクリと嫌悪とも悪寒ともつかない気持ち悪い何かが走る。気づいてしまつたのだ、六番田も、一番田も。

六番田は再び走り出した。もひー一番田の答えを待つ必要などない。急な六番田の行動に一番田ははつとし、追いかけてこよひとする。シダが一番田の足を取り、木々が一番田の道をふさぐ。開かれたと思つた道は六番田が過ぎれば瞬く間に閉じていく。それでも一番田は追いかけてこよひとした。なんて義理堅いのだらうか。先ほどまであんなに睨みつけていた相手を、それでも弟として連れ戻そうとするなんじ。

六番田は動かしていた足を止め、下にこむ一番田くと顔をかける。

「もひー、追わんでくれ」

それは先ほどまどとは違う、口クの声だった。ぜいぜいと息を切らす一番田に、分かるだらうと問いかける。

「イチにい。おれはもひ口クじやない。おつかあの子でも、イチにいの弟でも、……人の子でも、ない」

困つたように笑み、おやいぐ最後になるであらう、口クである自分を一番田に見せた。

「おれはもひ 鬼ん兜じや」

やうやうと、六番田はすつと瞳を細める。やくら、と一番田の背筋に、えも言われぬ何かが走つた。

「去ね。ソリは主とおれの山だ。お前がが立ち入つて良い場所ではない」

「嘘つや否や、六番田は踵を返しまた走り出す。行くあてはない。けれど自分は行かねばならない。白鬼が白鬼で、六番田が六番田であるからだ。たった一人の家族だからだ。」

走つて走つてたどり着いた先は、白鬼の大事にしている大樹のもとだつた。もう冬だというのに、その木だけは大きく葉を茂らせている。寒くなつてきたからと、最近はめつきり近づかなくなつた大樹のもとにも、白鬼はいなかつた。けれど、すぐ近くから嫌なにおいがする。六番田は鼻に皺を寄せ、匂いのするほうへそろりと近づいてつた。

大樹から離れ、少し下つたところに白鬼はいた。たくさんの里の二ングエンたちに囲まれて、白銀の髪がちらちらと揺れて見える。二ングエンはみな男で、大人と呼ばれるものたちのようだつた。六番田が見たことのある者もいる。二ングエンはみな一様に、手元に何やら物騒なものを持つてゐる。話し合つような雰囲気は、全くない。何をしようとしているのか、幼い六番田の頭でも容易に分かつた。

氣付いた六番田はその場に飛び出そうとする。が、ふと合つた金の瞳に、足が動かなくなつた。来なくていい、というよりは来るな、といつたその鋭い目に、六番田は困惑した。

どうして白鬼は抵抗しないのか。六番田でさえ拒絕したというのに、あんなにたくさん二ングエンに囲まれて、苦しくはないのだろうか。白鬼ならば、たとえ山が眠りに就こうとしても、二ングエンたちを追い返すことくらい簡単なはずなのだ。いや、それ以前に、ここまで入り込むこともできなかつたはずなのに。

「シロ……？」

呼びかけた声はあまりにも小さく、届く前に霧散してしまつ。揺れる瞳の先で、ふと、白鬼が笑んだ氣がした。ゆるく細まつた金色があまりにも綺麗で、小さな月があるようだと思つた。そうだつた、初めて見たときも、月のようだと思つたのだ。薄く弧をかいた唇が、六番目を呼んだ。

六番目が目を奪われてゐる間に、二ングエンたちは動いた。ぐわり、と腕と大きな凶器を持ち上げる。よく見ればその二ングエンは見たことのある顔だつた。

視界が、赤く染まる。一番目と同じ、きっと自分ともそこにいる二ングエンたちとも同じ、赤が散る。けれど何よりもキレイだと思つた。濁りのない、穢れのない、同じ赤が、散る。

「…………こやだあ！ しり…………、シロおー！」

思わず叫んでいた。その瞬間、赤かつた視界が真つ白になる。すべてが白く霞んで、だんだんと見えなくなる。

額が熱い。身体が熱い。まるで焼けるようだつた。

何も見えない。白、しろ、シロ。一対の小さな月だけが、じつと六番目を見ていた。

次第にそれさえも消えて、なにも、分からなくなつた。

気がついたら、すべてが消えていた。ぼうっと辺りを見渡して見えるのは、木と、草と、地面と、山だけ。それ以外すべて、なくなつていた。それ以外すべて、消えていた。たくさんニンゲンも、その気配も、嫌悪感も、シロも。

「……なくなつた」

ぼつりと六番田は零す。白鬼はビルにて行つてしまつたのだらうか。つい先ほどまでそこにいたのに、痕跡すらない。山の中にいるという気配も、感じられなかつた。

「シロ……、ビル行つたんじゃ……？」

ゆづくつゆづくつと、六番田は山道を登つてこぐ。見当たらない白鬼の気配を捜して、彷徨い続ける。

白鬼はどこへ消えてしまつたのか。なぜ自分の手の前からいなくなつてしまつたのか。もつてこにはいないのだらうか。ビルして置いていったのだろうか。六番田にとつて、白鬼は唯一であったといつのう。

（ずっと一緒に、言つたのに）

六番田はそれでも白鬼を捜し続けた。ふらふらと歩いていふと、動物たちが顔を覗かせる。一番の仲良しである子猿のナナがどこからとんなく現れ、六番田の肩に乗る。やわらかな毛を六番田の首にこすりつけて、嬉しそうに鳴いた。

ぬしさま。

子猿はそう鳴いてさらに対り寄つてくる。

主様、それは山の動物たちが白鬼を呼ぶときに使つていて呼び名だ。そばに白鬼がいるのだろうかと辺りを見渡すが、やはり見当たらない。

ふと見上げれば、白鬼が大切にしていた大樹があった。じい、と空へと広がる枝葉を見上げていると、風が六畳の頬をなでた。風がすうすうと葉っぱを揺らして過ぎていく。地面がごうごうと唸りを上げる。地に触れた手は、わずかに震えていた。耳を近づければ、唸りがはつきりと届く。やせしく、響く。

「……ああ

大樹の幹に触れ、そつと撫ぜる。

「……に、いたのか……」

触れたそこから伝わるぬくもりは、白鬼のそれと違ひなかつた。短い腕を回し、ぎゅう、と幹につかまる。につんと額をぶつけると、あの細い指に頭を撫でられた気がした。指はすぐに離れ、代わりにふわりと欠伸のような風が吹く。次第に柔らかくなる風は寝息のようだ、響く地面はいびきのようだつた。

「……そつか、ようやく、眠れたのか

ゆづくつと木肌を指で撫ぜ、六畳の白鬼はくすりと笑つた。

「おやすみ、シロ」

白髪の鬼に答える声はなく、ただ穏やかな風が通り過ぎるだけだ
つた。

(これからは、おれが守つていいくから)
(シロは、ゆつくり休んで)

ねつめご（後書き）

誤字脱字、文章等おかしな点がござればごめんね。連絡ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2371m/>

おにのこ

2010年10月13日22時17分発行